

## 第1報 二世帯同居の住生活の実態

日本女大家政 沖田富美子 桜の聖母短大 ○佐藤美枝子

目的 近年高齢化現象に伴う、一人暮らしの高齢者の増加あるいは都市圏内の土地取得が困難になっている。土地の有効利用の面から二世帯住宅\*の果たす役割は大きく、二世帯住宅の需要は増加している。本研究は一地方都市における二世帯同居住宅にみられる住まい方の実態とその居住者の住意識を把握することにより、地方都市における二世帯住居の方向性を探ることを目的とする。特に住居水準(収入・職業など)と入居者の成層過程(家族構成・世代など)による差異を明らかにする。

方法 福島市及び福島市近郊における二世帯同居住宅居住者を対象に、親と子世帯それぞれにアンケート調査を中心に聞き取り調査を行った。調査対象数は、親、子各世帯 220件で有効回収数は各208世帯である。調査期間は1992年8月中旬～9月中旬である。

結果 ①今回調査対象地域では、敷地に2住戸あるいは母屋+離れのタイプはほとんどなく、一住宅に親子両世帯が居住する形態が多い(208件中189件)。しかし、いわゆる二世帯住宅は約1割ある。②現住宅は親の持家が約半数を占め、居間、台所、食事室の形式からみると、3室が一室、台所・食事室が一緒、3室が別々の3タイプに分散する。③同居するにあたって新築された住宅は2割である。④生活行為別その空間の現状と満足度については、居間、接客室、食事室、台所、浴室、玄関、便所、洗面所の各空間ともに共用のものが多くその現状に満足しているものが多い。⑤しかし、親と子により現状に対する満足度及び今後の希望に対する傾向はやや異なる。⑥同居に対する意識は、現在の同居に満足しているものは親(55%)子(40%)ともに約半数である。\*親・子世帯住空間が独立している住宅。